通信とコロナ禍

通信ソサイエティ和文論文誌編集委員長 笹森崇行
Takayuki Sasamori

2020年もまもなく終わりに近づいています。今年は誰しも新型コロナウイルス感染症に翻弄された1年だったのではないかと拝察致します。厚生労働省の発表を調べますと2020年1月中旬に国内でも感染者が現れ始めています。その後、3月下旬から1日ごとの陽性者数が増え始めて、4月11日には第1波の最大値708人を記録しました。16日に全国へ緊急事態宣言が出された後、陽性者数は一旦落ち着いたのですが、5月25日に緊急事態宣言が全面解除になりました。これで生活が元どおりに戻るかと思われたのですが、残念ながら7月頃から再び増え始め、8月7日には今までの最大値である1,595人の陽性者数が記録されました。今、私が原稿を書いているのは8月中旬です。国内としては1日ごとの陽性者数が徐々に減り始めていますが、緊迫した状況の地域もあり、相変わらず制約が多い生活がいつまで続くか分からない不安な日々を過ごしています。

次に、電子情報通信学会に関連する新型コロナウイルス感染症による影響についても触れさせていただきます。まずは2020年3月の総合大会が中止になりました。大会の中止は、私にとっては記憶に新しい2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災の方が耳慣れているかもしれませんが）による2011年総合大会の中止以来です。次に、通信ソサイエティの研究会の開催状況を研究会発表申込みシステムによって調べますと、3月から5月までの期間において開催が予定されていた27の研究会のうち、13が中止になりました。しかしその一方で、4月からは開催形式をオンラインに変更して開催する研究会が現れ始め、5月下旬には全ての研究会がオンライン開催に切り替わりました。当初、私はどの程度オンラインで研究会ができるのか半信半疑なところもありましたが、すぐに「通信」が有能であることに気付き考えを改めます。研究会のオンライン開催の経験が蓄積されてきたこともあってか、9月のソサイエティ大会が初めての完全オンライン開催となります。一般講演とシンポジウム講演の投稿件数は1,003件も集まり、これは2019年の8割に相当するそうです。通常は開催期間中の参加人数が延べ5,000人以上にもなる大会ですから、単純

に計算すると今回も延べ4,000人以上の参加者になるのでしょうか。これほど多くの人たちが双方向通信を使って幾つものチャンネル（会議室）に分かれて大会を行うというのですから、私自身、通信に密接に関わる環境や仕事に身を置いているにもかかわらず、通信の能力や技術の進歩を改めて認識し驚いています。この大会でも、オンラインを利用して参加者全員が力を合わせて、素晴らしい研究発表や白熱した議論が行われることでしょう。ある意味ではこの大会は通信の専門家が集まって行う大きな通信実験であると考えられます。新型コロナウイルスについては悪いことばかりが頭に浮かびますが、今大会の経験から新しい研究テーマや技術が開拓されて次以降の大会で発表されることを期待しています。

三つ目は私が担当している和文論文誌編集委員会についてです。その主な仕事は、ほぼ毎月開催される編集委員会において、和文論文誌へ御投稿頂いた論文の採否を判断することです。査読委員の意見が分かれた場合など判定に迷うこともありますが、通信ソサイエティの各分野から集まって頂いた第一線の専門家である編集委員会メンバーが意見を出し合い、知恵を絞って公平な判定を心掛けて審議しています。著者へ判定を通知させて頂く際にも、査読委員の意見が正確に著者に伝わるよう、また不採録の場合でも次の投稿につながるように、細心の注意を払いながら通知文を作成しています。その和文論文誌編集委員会も2020年3月からはオンライン会議が続いています。会議室に集まって行う会議と比べて、遠くにいる人たちと話をしている感覚、心の距離とでもいうのでしょうか、それを残念ながらどうしても感じます。1か所に集まって顔を合わせて議論する臨場感が、通信でも近い将来は更に伝わるよう期待しています。

最後に、和文論文誌編集委員会は皆様の研究成果の発表の場として役立てるようこれからも努力していく所存ですので、通信の力で日々の生活の閉塞感を打ち破るような研究成果の御投稿をお待ちしております。